

治大學  
學部  
學生會通信

No. 16

発行所  
農学部学生会  
情宣局  
昭和四十年一月一日

昨年末、農学部問題が、学生側のニシティタイプで一応終了したから、協定書を頂戴する運動が結果物だのをめぐり、農学部だけではなく全大学的段階で、様々な問題が提起されていく。

オ一には直接的な結果として、学長及び中央委員会長レベルの問題として結ばれた今回の協定が、客観的には農学部の基本的立場を維持部教員、学生も善導づけた事。

またその結果としてオ二には、当然の事ながら農学部問題に対する総合教養会の態度が今までのよう、「生田は明大の船出だ」となどという象徴主義的攻防から、より高次の段階へと変質しつつある事などである。

オ三には、この間の一連の問題にとつて、差し前のエレメンタリーアリヤが今までも出なかつた「社会学部問題調査報告書」が表面化した事。これは二つの意味で大きな問題を投げかけている。「社会学部問題」が少くとも、これまで公的には周知の範囲で、農学部問題が一度も出なかつた「社会学部問題調査報告書」が表面化したことである。

事実ではなかつたし、燕山高学生にとつては、今までこの吉  
國の空なまづいで諭議會もあつた。学部未計画なる問題が由々  
くさな内容抜きで諭議會もあつた。燕山高学生にとつては、今までこの吉  
問題は非常に混亂をしてきた。そこで要則点にものうつて、我々  
がこれまで一貫して斗つてきた運動の基本的性格を再確認する  
ことにしよう。

×

×

×

×

今回の斗争を簡単に書きするならば、我が燕学の教育は体制の  
不備に対する学生大衆の根柢的不満は過去から深刻に存在して  
おり、それがたまたま、正不入学問題によって田事件となり過報の  
中で、学生会執行部の指導のもと乗り越えて発展した事を才一に  
見なければならないである。

今まで学部で学生会審議が一貫否決され、次に参加した「学生  
の投票」によつてこの運動がトライキ斗争にまで発展した事実  
は、前記の内容を勇弁に物語つてゐる。学生大会で決定された  
當面の目標は、「教養会は、直の問題點に対して責任を負う事、  
そして二、農業部の得失計画を提出生一体となつて追求する事  
であった。その精神は教養の個人的責任を重視のすみをつづ  
くよう追及する事だけでもなければ、型式的な何々諭議會とい  
うまことに学生代表が名前述ねる事だけでもなかつたはず

- 1

ら一貫して見られるのは、文部省部門ではいかなる学生でも、そのかどい教育の基本的プロトコロンを通じた視点から欠けてはならない。解体とか罵戦とか罵戦が叫ばれるのは存在意義がある、無いのかという点を通じて語られるべきなのである。する事を前提とした学部再構成など全く未実験である。ここではつまりことわざをきいたのは、学生会は何かない事をやろうといつてはいるのではない。我々が今ぶつといる戀とは一休何なのか、又教育部の教育は何を目指してそれがどの様に分析したのか、という面相を探求しつゝ、の将来を創造しようといつて事なのである。

そのような方法で問題を探るならば、明大は数学部的に全國アカデミックスの先頭に立つことになる。

し分析的明確なことであつたは、まさに、そのような問題が私学生がなる医学部の矛盾、ひいては日本資本主義下に生れる豊後の位置が明確にされ得ないまゝ、明治大学医学部にて「学問」として存在し、「授業」が行なわれてきたことにある。我が以上のような現状に対する不満の発露が、講師員を含むんだが、の二定期間の放課とて、「易定算」といふ形で勝ち取られたと、評議すべきである。そのような観点立ては実質的斗争はまさにこの時点から始まると言えらる。結算書が四類の学部専門講師委員会の実質化が教授・学生会議する重大な汚染とするゆえんである。

では何等か専門委員会はどのようなものであるのか、それは然然の如く、我々が通じてはいたる所と同様のものか、我々はどういう意味で開設していくべきか等々の諸問題、疑問にあらざるものであるが、我々が再び専門講師が遂達しなければならないのは、我々が専門斗争の通路で再び西田氏指摘した、長い線を構成しないと至ることである。

中義塾の実質化が「六次大講」として現われ、一網打尽される人間像は陰謀的に主徳性欲を自慢している現在。学内外のそれ

三面する

し分析的明確なことであつたは、まさに、そのような問題が私学生がなる医学部の矛盾、ひいては日本資本主義下に生れる豊後の位置が明確にされ得ないまゝ、明治大学医学部にて「学問」として存在し、「授業」が行なわれてきたことにある。我が以上のような現状に対する不満の発露が、講師員を含むんだが、この一定程度の欲求として、「陽定審」といふ形で勝ち取られたと、評議すべきである。そのような観点立てて実質的斗合はまさにこの時点から始まると言えども、結局著者四頭の学部内構成員委員会の実質化が教授・学生会並面する重大な現象となるゆえんである。

では何等かの便覧会はどのようなものであるのか、それは然然の如く、我々が開設しておる種類とは申すまいか、我々はどのように開設しておるか等々の諸問題、疑問にあらざるものであるが、我々が再び開設した際は遂にしなければならないのは、我々が努力斗争の過程で再び西田氏指揮した、長い間の想を構成し、それと切り替えるものは、能ならぬ為故、学生以外の何ものでもない」と書こうことがある。

中大義の実質化が「六大学説」として現われ、一網打尽される人間像は陰謀論に主体性缺損を自認している現在。学内外のそれ

今回締結された協定は、かかる精神にもとづいて作成されたものなのであるから、現在はまだほんの才一段階終了しただけなのである。問題は、学生が勝つたとか教説会が負けたとかいう事ではなく、教説会・学生会の実りある活動に入れるかどうかという点にかかっているはずである。

そのような意味で協定書の精神は断固守らなければならぬ。教説会との間の行動を見なれば、かなりましめかわる原助的な正しい姿勢ばかりは見られなかつた学説部が突出に與する問題があつた学生会側の態度はそれである。

しかし学生はこの類「スポーツ」ではないがアドベンチャーリーを取ろう。問題の質に全努力を集中するにしよる明大の農業部だけではなく、全国の農業部に与えられる相対的的地位沈下という現象に直面し、その中で私学における農業部の存在意義を教説会と共に発見しよう。

現在我々がかかるている種々な問題を、状況から押しつけられたの中にとじこもるものではなく、そのやうをとりはらつて来たをさくらだす事により解決しよう。

格定が特約される前の段階で、教授会は農学部の将来の発展にどう貢献するか、良い意味づけ悪い意味づけで七〇点満点がいかで実行されるかなどという問題が莫大の大問題であるといふ意味の草を表明している。

そしてじつに案が実現されれば農学部は良くなるらしい。同時に言わねた。良くなるといふは具体的にどんな事なのかということは一層詰らざり。しかし以後の社会科学部の公表と、いふような条件を加味してみると、前記のところを踏襲通り受け取ることはどうとう無理というものであろう。わがただ見方をするならば、七〇一案の実行は学科セクトの解消、教科の割分、専門化などして事を通じて学部解体への道ならしをしているのだと、これがいふことはない。

前述の農学部の相続的機能低下と、いう我々につけられれた苦難的な条件に目をそむき現状をいかにもうまくカッコワフけるかといふ事だけにとどまっているのではないだろうか。それは社会学部だけではなく、前から問題とされていた農学部廃止と

る。  
間の場を守るものも居、学生なのである。  
教育の主体者が教授、学生であるが故に、斗かわれた今回の  
斗争であつたし、忍耐と才四項目の学業成績等委員会に最終  
的に責任を持ち、義務を負うのもまた、教育であり学生であ

学部再建準備委員会では何が討議されるゝか、オニにそれは所謂人造りの藝術精神たる、何を目的にとるか等の問題を教育するのか、つまり教育の目的及び対象を明確にすることであらう。現在の文理学部生卒業後の進路が必ずしも農業関係に限られないのは農業専門ない農業の學生の教育といふ点から見れば一定程度評価できるとしても、文理学部に在りては農業の専門家としての資格をもつて卒業する農学生の方としては妥当性を欠くものであるといわざるを得ないであらう。

では農学生はオニ次農業たる農業だけを担当して、それ自らの使命を全こしたことになるであらうか、否、國家統治資本主義の發展を実現した日本資本主義下における農業は、畢竟本主義一農本主義でもつては、その社会構造的機能を十分に果し得ないのであらう。以上のように文理学部再建準備委員会

はまず明治大学医学部における教育の基本を封筒から語りきる。また、その集約されたものが、具体的な教科書、つまり「解説成、授業科目解説」でして物化されなければならないだろう。

オニー、現在までの一部の正常な発展を経てきたものは何か、それが一般的日本資本主義下の教育と語られるのみで無意味であろう。国内外の情勢、学内外の現状を分析し、専門部がどのとうに經營して現在に至つたのか、それを明確に把握すべきである。オの具體化の前掛には、現在までの歴史

的總括が必須であるし、準備あらう。

- 4 -

学生會館

生田田中ノアーチーの問題を解いて、十一年前よりは、私の切なき要望でもなかつた生田田中の学生会館問題は、わざわざ、学校職員の無責任態度が続四五十年の間、田中がやぶさかれていた。学校職員は四十年度着工の具体的なプランを何ら示す。着工の度合で全国の大学調査を行ひ会議室問題をはじめ数部問題となつて、あくまで、おあいそ、的ナチサクな自身を作つた。図書室が先で学部は後だと問題を意識的にして学生に無理をさせた。連署二著者をやせまつて、興工学生会は、資本的に四十年間、着工の度合で全国の大学調査を行ひ会議室問題をはじめ数部問題からなる連署一七〇〇坪の具体的な試案を提出してゐる。

学生生活の研究として、本日の講演をなすとて、筆者的研究の第一回として、又、学生の生活を守るものとして、いわゆる学年なるキヤが必要不可欠のものとして考へられるのである。

学校規約東不履行を行ふんと、連絡会議は教育の科学的保障のないまことに、学生説得を行つてゐる。我々は、学校規約の不當な対策を指摘し、農工連絡会議の姿勢を正しく方向に進ませる運動を強く行い、学生会は早期に工の具体的リント、その為に科学的の裏手を覺悟しなければならぬだろ。

全国農科大学の傾向

者技術者の養成である。地域の農業の合理化と技術を組むものである。

二三は、融合農学などといふ技術的ではかなり幅広いにわたる。その研究をなし、主に中央官府の指導者、研究所員の養成を目的とした大学である。ここに入るのは東大、京大等の中心的国立大学などが入るであろう。

オ三のバーチャンとしては、農業及びそれに関係した会社への中堅技術者の養成を目的として、主に私立大学、農業大学等である。この中には日本農業試験場の部下による明治農業院の花造栽培講習所等にそつた技術者として園芸等の花形産業が、極に力をいれられている。その他には民間食品会社とのことで、食品化学等を中心している。

方四としては特殊な研究をもつてその特色としている大学であり兵庫県大等いくつかの大学が存在する。又東京農大などだけは専門学校等でも入るといふようである。これら大学はその外面の少しか充実しない場合もあるが、農業系の一つの分野を方として考えねばならないものであらう。

以上の如く大ざつて日本の大学農業系を分類したが、専門大学では特色とか名分がはつきりしているが、准大学は明確に分化しているとは言えない。

- 5 -

卷一百一十五

生田の山口工業部の事務がほぼ完了して、外観的には昔の頃からある感じの工場にならねえ。とほんのちも駆除工事のことで学生が多く、一ノ木丁寧に又参考書を手にと内規のことはもうつかない時期である。この駆除工事はもはやつかない時代である。

その駆除工事にあつて、昨年中吹き飛ばされた農業部会風は、いまだその余韻を残すのかから風呂場を廃して、ひるまうである。

昨年中の風はいろいろな被災と同様に一つの大掃除の意味をもつたのである。農芸があるといよいよ再建がござだされねが、往々にして沙汰方式になつてしまふ、又同様の被災を繰り返すことになるのである。

去る一月二十一日学生会と教務会の間に準備委員会の下会議がもたれたが、教授会の立あぐれにより冗談なものとなりえなかつた。しかしながらまことにこのような全会議を進め、一日も早く侏儒小屋からぬけ出されるよう奮闘的に進めたはねばならない。

その過程に於て特殊な新な研究をしていくとか日本農業におけるある部面のリーダーの養成とかの特色をもつた学部休制の確立、研究の推進をなしていくべきである。

はもちらんなく、『大学教育』の問題であつて先般の学年内に主張された  
斗争とその指向と同じくするということである。現在一般によく  
マヌスプロ教育、と言われることと、我々の教育の場は種々の面  
において歪曲されている。特に教育においてその変化は甚しき。  
實業の限界を破る私學の精神に基き、社會に多效の恩恵を  
送つてその基盤を折たう状態から、現段階の体制が要求するな  
どとの内面的プロセスへ進つてゐる。おのづから教育は第  
一的な研究は優先を置いてゆくのである。本来の人間關係は肝  
力的であり、精神的には多數の「ルームペイト」学生を生みだしてゐる  
といふ状況の中、教育の方面は「ルームペイト」たちを中心として未來の  
「ルームペイト」たちへ、つづいて、由ては、田舎者たる我々がまじり